

論 文

高等専門学校における学生の部活動ニーズ に関する研究

横山 剛士¹

¹一般教育科—保健体育 (Liberal Arts-Physical Education, Nagaoka National College of Technology) ¹

Study of Expectation and Needs to Clubs in National College

Takeshi YOKOYAMA¹

Abstract

The purpose of this study is to analyze the extracurricular club activity needs of students in National College. National College students ($N=208$) completed questionnaires. The results revealed that students had high needs and expectations to club activity, and the needs were diverse. Thus, in order to manage club activity, it is important to focus not only on autonomy of students, but also on leadership of teachers.

Key Words : *needs, club activity, difficulty of teaching*

1. 目的と問題の所在

本稿の目的は、長岡工業高等専門学校（以下、本校）の学生を対象にした質問紙調査から、高等専門学校における部活動のニーズを分析し、そこから部活動の指導・運営の在り方について考察することである。具体的には、本校の第一学年の学生の中学校時の部活動経験、本校の部活動に対する期待、ニーズを明らかにすることを通じて、高等専門学校の部活動の指導・運営の在り方について検討する。

本研究の背後にある問題意識は、次のとおりである。部活動は、授業や学校行事と並び学生の学校生活を豊かにする重要な学校教育活動である。学校側から見ると、部活動には、コミュニケーション能力の向上、挨拶や礼儀といった社会的規範を身に付ける場、学生の居場所づくり等といった教育的機能が

期待されている¹⁾。

学生の側から見ても、部活動は、彼ら・彼女ら自身が主体的に仲間と協力しながら、スポーツや文化、科学への理解を深めていく貴重な場である。

しかしながら、本校の部活動は、次の指導・運営上の課題を抱えていると思われる。まず、部活動の学校教育上の位置づけが曖昧である。部活動という場をどのように性格づけるのか、何をどのように教授するのか、教師間で共有すべき目的、内容が定かではない。部活動の指導・運営が、教師個々人の解釈、教育観、部活動観によってなされている。

第二に、そのことが、部活動間、教師間の取り組みに差異を生んでいる。部活動指導・運営が、各教師の解釈によってなされているため、具体的な指導、運営方法も各教師の考え方、力量に依存している。

第三に、では、活動主体である学生が部活動に対

し何を期待し、どのように運営していきたいと思っているのか、そうした部活動に関する期待・ニーズについての情報が少ない。部活動を教育の場と見做し、活性化させるのであれば、場を提供する教員側が彼らの部活動に抱いている期待やニーズを把握することが必要だろう。期待やニーズに合致しない場をいくら提供しても、彼らは、部活動という場にアクセスしてこないと考えられるからである。

過去に本校の部活動について検討しているものに、北村の報告²⁾がある。北村は、当時の野球部の在り方について検討し、部活動は学業成績へ悪影響を及ぼしていないものの、「練習で疲れて勉強ができない」、「大会出場中は実験に参加できないので困る」といった面で学業と部活動との両立が難しいと部活動をめぐるアンビバレントな状況について指摘している。

本校以外的高等専門学校の実践について見てみると、部活動運営を部分的に学生に移行し、学生の主体性育成を目指している事例³⁾や公開講座を実施し地域への貢献しようとしている事例⁴⁾がある。

ただ、これらの研究は、今後、個別の部活動の改善の方向性を示している点については示唆的であるものの、学校として部活動をどのように改善していけばよいかという点についてはデータや分析の面で限界を有している。

部活動に関する課題は、公立学校においても見られるようである。中澤ら⁵⁾は、公立中学校の教員を対象にした質問紙調査から、部活動運営の課題を明らかにしている。それによると、公立中学校の部活動の課題は、「施設や設備、備品や道具が整っていないこと」、「部活動の時間や量が負担になっていること」、「顧問を担当するのは職務かどうか曖昧なこと」などが挙げられている。

中学校と高等学校の部活動の現状について見てみると、西島ら⁶⁾は、生徒を対象にした質問紙調査より、以下の点を明らかにしている。本研究に関わって重要な論点は、次の2点である。

第一に、部活動の効用は、練習や試合に打ち込むことで得られるということである。「うまくなる」「友だちが得られる」、「精神強くなる」、「礼儀正しくなる」といった効用は、練習や大会、コンクールで汗を流したり、切磋琢磨する過程で獲得される (pp.44-49)。

第二に、部活動の加入は、学業や生活態度へ肯定的影響を及ぼしていることである。部活動加入者は、非加入者よりも、授業への態度が良好であり、校則も守る傾向にある (pp.85-98)。

部活動に熱心に取り組むことで、他の授業活動に支障が出るのではないかと想定できるが、先行研究からは、そうではない姿が浮かび上がってきている。中学校と高等学校の傾向であるだけに、本校の実践にそのまま反映できるかについては慎重に検討する必要があるものの、先行研究の結果は、本校においても部活動の活性化が授業や学級活動、寮生活等に肯定的影響を及ぼす可能性を示している。

2. 研究の方法

2. 1 調査内容

以上の問題意識を踏まえ、本稿は、学生の部活動経験や部活動への期待やニーズを分析することを通じて、今後の部活動指導・運営に示唆を得ることを企図した。本研究は、研究課題に迫るため、以下の内容の質問紙調査を作成した。

- ①中学校時の部活動経験・学校生活状況
- ②学校生活における部活動の位置づけ
- ③部活動に対する期待
- ④部活動の指導・運営に関するニーズ

2. 2 調査の概要

調査は、平成23年度に長岡工業高等専門学校に入学した第一学年の学生208名に『学校体育と学校生活に関する調査』と称した質問紙調査を実施した。調査期間は、平成23年4月7日から平成23年4月13日までである。

調査票の配布に際して、回答によって個人が特定されることがないこと、不利益が及ぶことはないことを周知した。調査票の配布、回収は、平成23年度の保健体育の最初の講義オリエンテーションの時間を使って行なった。回答に要した時間は、およそ15～20分である。

有効回答数は、208 (配布数208, 回収率100%) である。分析は、SPSS(12.0)を用いて行った。

3. 結果

3. 1 中学校時の部活動経験

はじめに、本校第一学年の学生の中学校時の部活動経験について検討する。表-1は、中学校の時にどのような部に入っていたのかを尋ねた結果である。結果を見ると、ほとんどの者が、中学校時、部活

動に入部しており、その大半が運動部に所属していたことがわかる。わずかであるが、中には、運動部と文化部を兼部をしていた学生もいる。多くの学生にとって部活動は、学校生活上、日常の活動として取り組まれていたことがうかがえる。

表-1 中学校時の部活動加入率

中学校時の部活動の入部状況	%
運動部に入っていた	85.6
文化部に入っていた	12.5
入っていなかった	1.0
運動部・文化部を兼部	1.0

表-2は、部活動に入部していた者に対して、部活動の取り組み方を尋ねた結果である。

表-2 中学校時の部活動の取り組み度

部活動の取り組み度	%
とても一生懸命取り組んだ	49.5
どちらかといえば一生懸命取り組んだ	34.0
どちらともいえない	9.2
どちらかといえば一生懸命取り組んでいない	5.3
ぜんぜん一生懸命取り組んでいない	1.9

多くの者が、「一生懸命取り組んだ」、「どちらかといえば一生懸命取り組んだ」と回答している。その一方で、およそ15%の学生が、中学校時の部活動に対する取り組み方について「どちらともいえない」、「一生懸命取り組んでいない」と回答している。

3. 2 部活動の取り組み方と学業・家庭での学習時間との関連

これまでの結果を見てわかるとおり、部活動は、学生の日常生活に取り込まれている活動であると言えるだろう。そのように考えると、部活動の取り組み方は、授業や家庭生活といった他の活動にも影響を及ぼすことが考えられる。

次に「部活動に一生懸命取り組むことと学業や家庭での学習時間にどのような関連があるのか」という問いを立て、この点について検討してみたい。

まず、先の「とても一生懸命取り組んだ」と「どちらかといえば一生懸命取り組んだ」と回答したものを「一生懸命群」とカテゴリー化し、「どちらともいえない」、「どちらかといえば一生懸命取り組んでいない」、「ぜんぜん一生懸命取り組んでいない」と回答したものを「非一生懸命群」とカテゴリー

化し、両群の中学校時の5教科（国語・数学・理科・社会・英語）の成績を比較した。

表-3 部活動の取り組み方と学業の関連 (%)

5教科の成績 / カテゴリー	一生懸命群	非一生懸命群	全体
よかった	25.6	35.3	27.2
どちらかといえばよかった	59.3	52.9	58.3
真ん中くらい	14.0	8.8	13.1
どちらかといえば悪かった	1.2	0.0	1.0
悪かった	0.0	2.9	0.5
全体	100	100	100

5教科の成績は、クラス内での相対的位置を「よかった」から「悪かった」までの5段階で尋ねたものである。ここで、5教科の成績を取り上げるのは、5教科の成績は、授業での取り組み方を表す指標として相応しいだろうと考えたからである。その結果を示したものが表-3である。

「よかった」、「どちらかといえばよかった」の合計を比較してみると、一生懸命群が84.9%、非一生懸命群が88.2%となっており、非一生懸命群の成績のほうがよい傾向がみられる。しかし、統計的分析（ χ^2 乗検定）では、両群に有意な差は認められなかった。

このことから、本校の学生は、中学校時、部活動に一生懸命取り組んでいても、授業にも比較的熱心に取り組んでいたということがいえる。

次に、両群の家庭での学習時間を比較した。その結果を示したものが、表-4である。

表-4 部活動の取り組み方と家庭での学習時間の関連

カテゴリー	家庭での学習時間 (1日平均, 単位分)
一生懸命群	86.9
非一生懸命群	73.8

一生懸命群の家庭での学習時間が86.9分（一日平均）、非一生懸命群の家庭での学習時間が73.8分（一日平均）であり、両群には、およそ13分の差がある。部活動に一生懸命取り組んだ者も家庭での学習時間を確保していることがうかがえる。平均値の差の検定（対応のない検定）を実施した結果、有意な差は見られなかったが、この差は大きいとみるべきだろう。一日平均にすると13分程度でも、中学校3年間という時間を考えると、大きな差が生まれるからである。なお、ここで確認しておきたいのは、

学習時間の絶対量を問題にしているわけではないことである。つまり、ここでは「家庭での学習時間の確保は、部活動に一生懸命取り組むことで阻害されているとはいえない」ということを確認しておきたい。

3. 3 学校生活における部活動の位置

学生は、学校生活を充実させる上で、部活動をどの程度重要だと考えているのだろうか。このことを確かめるため、学校生活における部活動の重要度を「あなたの学校生活を充実させる上で、部活動はどの程度重要なものですか？」と尋ね回答してもらった。

表-5を見ると、「とても重要」と「どちらかといえば重要」の合計がおよそ85%であり、ほとんどの学生が、学校生活を充実させる上で、部活動は重要であると考えている。

表-5 学校生活における部活動の位置づけ

学校生活における部活動の位置	%
とても重要	36.6
どちらかといえば重要	48.3
どちらともいえない	10.7
どちらかといえば重要ではない	4.4
まったく重要ではない	0.0

表-6は、調査時（4月）での、学生の部活動への入部希望状況を示したものである。具体的には、

「学校で部活動に入ろうと考えていますか」を尋ね、回答してもらった。

表-6 入学時の入部希望状況

部活動の入部意思	%
はい	72.5
まだ決めていない	25.6
いいえ	1.9

調査時の段階では、72.5%の学生が、何らかの部活動に入部しようと考えていたことがわかる。この結果からも、学校生活を充実させるには部活動は重要であると考えている学生が多いことがうかがえる。

部活動指導・運営の観点から見ると、こうした4月時点での学生の入部希望を入部行動、それぞれの活動の充実に結び付けられたかどうかということが課題であろう。

3. 4 部活動への期待

学生は、部活動にどのような期待を寄せているのだろうか。この点を検討するため、入部する意思のある学生に、部活動への期待を尋ねる項目を挙げ、「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの5件法で回答してもらった。その結果を示したものが表-7である。なお、ここでいう「部活動への期待」とは、「部活動の継続参加によって将来もたらされであろう効用」を指す。

もっとも指摘率の高かった項目は、「仲のよい友

表-7 部活動への期待 (%)

	とてもそう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	まったくそう思わない
仲のよい友達や先輩ができる	75.3	21.3	2.7	0.7	0.0
好きなことがうまくなる	71.1	24.8	3.4	0.7	0.0
授業とは違った充実感や達成感が得られる	70.7	25.3	3.3	0.7	0.0
心や体の健康の維持・増進に結びつく	51.3	29.3	15.3	2.0	2.0
礼儀や社会的マナーが身につく	48.7	36.7	12.7	0.7	1.3
リズムの良い学校生活になる	48.0	29.3	17.3	2.7	2.7
学業にいい影響がある	33.3	35.3	21.3	7.3	2.7
進学や就職に役立つ	17.4	28.9	25.5	19.5	8.7

達や先輩ができる」である。学科や学年を越えた人間関係を築ききっかけとして、部活動に期待を寄せていることがうかがえる。

次に指摘率の高かった項目は、「好きなことがうまくなる」、「授業とは違った充実感や達成感が得られる」である。学生は、部活動という場で、興味関心のあることを追求し、授業とは違った充実感や達成感を得たいと考えているようである。

次に指摘率の高った項目は、「心や体の健康の維持・増進に結びつく」、「礼儀や社会的マナーが身につく」、「リズムの良い学校生活になる」、「学業にいい影響がある」である。ここで興味深いのは、活動の効果が、リズムのよい学校生活を生んだり、学業へよい影響がある、と考えていることである。学生は、部活動は他の活動にも肯定的影響を及ぼすと考えているようである。

指摘率の最も低かった項目が「進学や就職に役立つ」である。ただ、それでも「とてもそう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計が46.3%となっており、約半数の学生が部活動が将来の進路選択に肯定的影響を及ぼすと考えている。

3. 5 部活動の入部を阻害する要因

次に、部活動の入部を阻害する要因について検討したい。具体的には、「部活動に入ろうと考えていますか」という問いに、「まだ決めていない」、「いいえ」と回答した学生に、入部を決めていない、入部しない理由を複数回答を可とし尋ねた。

表-8を見てみると、「練習に時間をとられて、勉強にさしつかえるといけないから」が51.8%と最も多い。

表-8 部活動の入部を阻害する要因 (%)

自分の入りたいクラブがないから	10.3
上手な人しか楽しめないと思うから	17.5
部活動が活発ではなさそうだから	5.3
練習に時間をとられて、勉強にさしつかえるといけないから	51.8
理由はないがなんとなく	33.3
学校外でやっている習い事や趣味等に取り組みたいから	22.8
活動にお金がかかるから	10.5

次は、「理由はないがなんとなく」(33.3%)、

「学校外でやっている習い事や趣味等に取り組みたいから」(22.8%)といった個人の動機に関わる要因である。次に指摘率の高い項目は、「上手な人しか楽しめないと思うから」の17.5%、「自分の入りたいクラブがないから」の10.3%である。これらは、「部活動が活発ではなさそうだから」(5.3%)と併せ、学校の部活動運営上、工夫の余地のある経営的要因である。したがって、今後の部活動の指導・運営の改善次第では、学生の入部行動に結びつく可能性がある。

「活動にお金がかかるから」といった家庭の経済的理由によって決めていない、入部しないと考えている者も10.5%いる。

3. 6 部活動に対するニーズ

次に、部活動に対するニーズについて検討する。なお、ここでは部活動に対するニーズを「部活動を充実させるための指導・運営に関する要望」と定義しておく。表-9は、部活動に対するニーズを尋ねた結果である。

「とてもそう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合計し、指摘率の高かった項目順に並びなおして、その指摘率に着目すると、最も高い指摘率を示している項目は、「下級生から上級生まで一緒になって楽しめる部」(95.2%)である。続いて、「初心者、経験者に関係なく、いろいろな技術レベルの人が一緒になって楽しめる部」(91.3%)、「5年間続けられる部」(83.4%)となっている。

次に、高い指摘率を示したのが、「自分(たち)で自主的に目標や練習計画を立てて、それを実践する部」(74.7%)、「しっかりと練習する部」(68.3%)であり、部活動に自主的、積極的に関わっていこうとする姿が見てとれる。

ただ、同時に、教師との関わりも求めているようである。「専門的な技術を教えてくれる部」(67.8%)、「先生がちゃんと見てくれている部」(60.0%)といった項目の指摘率の高さは、そのことを示しているといえよう。

勝利至高は、それほど高くないと言えよう。「全国レベルの大会やコンクールで活躍できる部」(53.7%)になるためには、日々の厳しい練習が求められるが、そうした「毎日練習する部」(36.6%)、「勝つことを目指して厳しい練習をする部」(32.7%)は、あまり望んでいない。

つまり、学生の部活動に対するニーズは、全国レベルの大会やコンクールの活躍そのものにあるというよりは、先輩・仲間と協力、切磋琢磨しながら興

味・関心のあることを追求し、そのことが結果的に全国レベルの大会やコンクールといった大きな大会につながればよいと考えていると解釈できる。

「他の部活動への参加も認めてくれる部」(39.6%)の指摘率は、ひとつの活動に特化するのではなく、様々な活動にチャレンジしてみたいという多志向性を示しているものと思われる。

4. 考察—ニーズから見る部活動指導・運営の課題—

教育研究における学習者のニーズ調査の難しさは、学習者のニーズを把握しながらも、単にそれを満たせばよいというわけではないところにある。たとえば「自分(たち)で主体的に目標や練習計画を立てて、それを実践したい」と要望していたとしても、方向性や方法が誤っていたり、合理的でなければ、それを方向づけてあげなければならないのが教師の役割である。最後に、これまでの分析を通じて、高等専門学校における部活動指導・運営に関する示唆を考察したい。

第一に、入学時点での学生の部活動に対する入部

希望は高い。彼らの入部の意思を入部行動につなげることができるかどうか、部活動の活性化のポイントとなるとと思われる。

そのことと関わって第二に、部活動に寄せる期待も高い。具体的には、「仲のよい友達や先輩ができる」、「好きなことがうまくなる」、「授業とは違った充実感や達成感が得られる」ことを期待しているが、「リズムの良い学校生活になる」、「学業にいい影響がある」に期待を寄せいている学生も多々いる。

第三に、部活動ニーズを分析すると、本校の部活動運営にあたるには、高度な指導力が求められることがわかる。

学生は、下級生から上級生まで一緒になって楽しめて、「初心者、経験者に関係なく、いろいろな技術レベルの人が一緒になって楽しめる部」を望んでいる。また、5年間続けたいと考えている。ここから、年齢、技術に幅のある集団を指導する力量が求められることがうかがえる。

また、「自分(たち)で自主的に目標や練習計画を立てて、それを実践する部」からわかるように、学生は部活動を主体的に創っていこうとする意思がある一方、「専門的な技術を教えてくれる部」、

表-9 部活動に対するニーズ (%)

	「どちらかといえばそう思う」の合計	「とてもそう思う」	「どちらかといえばそう思う」	「どちらともいえない」	「どちらかといえばそう思わない」	「まったくそう思わない」
下級生から上級生まで一緒になって楽しめる部	95.2	69.8	25.4	3.9	0.5	0.5
初心者、経験者に関係なく、いろいろな技術レベルの人が一緒になって楽しめる部	91.3	65.4	25.9	6.8	1.5	0.5
5年間続けられる部	83.4	52.7	30.7	14.1	0.0	2.4
自分(たち)で自主的に目標や練習計画を立てて、それを実践する部	74.7	33.2	41.5	17.6	6.3	1.5
しっかりと練習する部	68.3	37.6	30.7	25.9	4.4	1.5
専門的な技術を教えてくれる部	67.8	33.7	34.1	24.9	4.9	2.4
先生がちゃんと見てくれている部	60.0	23.9	36.1	30.7	6.8	2.4
全国レベルの大会やコンクールで活躍できる部	53.7	16.1	37.6	27.8	13.7	4.9
他の部活動への参加も認めてくれる部	39.6	17.6	22.0	44.9	9.8	5.9
毎日練習する部	36.6	13.2	23.4	36.1	16.1	11.2
勝つことを目指して厳しい練習をする部	32.7	9.8	22.9	33.7	21.0	12.7

「先生がちゃんと見てくれている部」も望んでいる。教師が、部活動指導、運営へどのように、どの程度、関与すればよいのか、その困難さがうかがえる。教員主導の部活動から学生主導の部活動へシフトした高野の事例では、学生主導の部活動にシフトすることで「日常的な声かけを今まで以上に行うことを心がけた」(p.766)という。これは、学生主導とは、教員が単に関与しないことではなく、学生主導だからこそ指導が必要になることを示している。自主性か、専門的指導かといった二者択一的考えでは運営が成り立たず、自主性でもあり、専門的指導でもありという両者を併存させた運営が求められる。

第四に、部活動に懸命に取り組むことは、学業や家庭での学習に肯定的影響を及ぼす可能性がある。少なくとも、本調査では、学業を大きく妨げる事実の確認できない。北村の報告では、高等専門学校のカリキュラム上の特有さから、学業と部活動の両立の困難性が指摘されている。ただ、学業へ及ぼす肯定的影響や学生の部活動に対する期待やニーズを考えれば、教員が当事者として各活動によりコミットしつつ、同時に、各部の活動のみに閉じることなく、教員間でコミュニケーションを活性化しながら、効果、効率的な部活動指導・運営に関するアイデアや知識の共有を図っていく、これを同時並行的に行うことが必要ではないだろうか。

- 2) 北村直樹：課外教育活動の目的と本校野球部の在り方について、長岡工業高等専門学校研究紀要，第14巻4号，pp.113-120，1978.
- 3) 高野淳司：学生が主体的に運営する部活動の仕組みに関する実践研究— 一関高専男子バレーボール部を例に一，高専教育，pp.761-766，2011.
- 4) 兼村裕介，矢澤睦，與那嶺尚弘，矢島邦昭：部活動における新しい取り組み—仙台高専広瀬キャンパスラグビー部の地域貢献活動と少人数制大会への参加—，高専教育，pp.767-772，2011.
- 5) 中澤篤，西島央，矢野博之，熊谷信司：中学校部活動の指導・運営の現状と次期指導要領に向けた課題に関する教育社会学的研究，東京大学大学院教育学研究科紀要第48巻，pp.317-337，2008.
- 6) 西島央：部活動その現状とこれからのあり方，学事出版，2006.

(2011.10.3 受付)

5. 結語

本稿は、学生を対象にした質問紙調査から、高等専門学校における部活動の指導・運営の在り方について考察することを目的とした。

本校では、今年度から部活動の体験，見学の期間が設けられたり，入部を積極的に推進する試みがなされている。分析結果からみても，こうした試みは，一定の効果を持っていると思われる。ただ，入部後の彼らの支援体制については，今後，検討が必要だろう。本稿は，高等専門学校の部活動指導・運営について質問紙調査によって局所的な傾向を把握したに過ぎない。分析結果を念頭に置きながら，活力が伝播するような部活動づくりに参加していくこと，これが筆者の部活動指導，運営に関する実践的課題である。

参考文献

- 1) 独立行政法人国立高等専門学校機構：平成22年度高等専門学校新任教員研修会報告書，pp.1-91，2010.

